

平成29年度第1回高砂市総合教育会議 会議録（公表用）

平成29年7月6日（木）高砂市総合教育会議を高砂市役所南庁舎5階大会議室において開会

出席委員

市長	登	幸人
教育長	衣笠	好一
委員	山名	克典
委員	吉田	美香
委員	神尾	信作
委員	布施	隆志

出席事務局職員

企画総務部長	江谷	恭一
企画総務部総務室長兼	永井	幹雄
企画総務部総務室総務課長	樽家	正治

こども未来部長	福原	裕子
---------	----	----

教育部長	大西	誠
教育部教育推進室長	永安	正彦
教育部教育推進室教育総務課長	都筑	広明
教育部学校教育室長	瀧野	祐一
教育部学校教育室学校教育課長	赤松	祐人
教育部学校教育室学校教育課指導係長	横山	善彦

傍聴者

4名

本日の議事

(1) 「高砂市小中一貫教育」の全市的な展開に向けて

○事務局

おはようございます。それでは、定刻になりましたので、これより平成29年度第1回高砂市総合教育会議を開会いたします。

最初に、市長から御挨拶をお願いいたします。

○登市長

おはようございます。平成29年度入りましての総合教育会議でございます。どうかよろしくお願い申し上げます。

教育委員会関係でもこの新年度に入りまして、いろいろ事業をしていただいております。特にその中でも、今日の新聞にも載っておりますが、工楽松右衛門邸旧宅の改修が進められております。今年度中には完成ということでございますけれども、またこの土曜日に現地説明会があるというようなことでございます。

それから、また、ほかの事業でも中学校の給食センターの用地取得ができて、あと、設計は今発注しているのですか。

○大西教育部長

はい。もう基本設計は終わってございます。もう実施設計に移ってございます。

○登市長

予定は平成31年の2学期に開始できたらということで、今、順調に進んでおります。

それから、梅井保育園改築について、梅井保育園はこども園になるということでございますけれども、あそこも用地を前の計画より広げまして、そして、今の園舎を使いながら、新しく園舎を建てていこうということで、やや計画は変更しましたが、子供さんにとっても、地域にとっても、先生方にとっても利便性が高まるようなそういう園になるというふうにも考えております。これも順調に今進めておるところでございます。

もう一つの課題として、小中一貫教育があります。これも2年でしたか。今、3年ですか。

○大西教育部長

4年です。

○登市長

今年は4年目になりまして、もうそろそろ今の状況等の整理をしていただく時期かなというふうにも思っております。今現在の取り組みの状況、そして、また、今後のスケジュールにつきまして、共通認識をもっておきたいというふうにも思っておりまして、今日の議題については小中一貫教育ということで挙げさせていただきました。

お手元の小中一貫教育ですけれども、これは基本的な考え。ここには余り出ていないのですが、私は、やっぱり知、徳、体ということの中で、知を上げることによって徳も上がるだろうというふうに考えております。それぞれバランスよく生育に応じた形で提供していく、また、伸ばしていく必要があるわけですが、中でもやっぱり知の部分。学力向上という部分にウエートも置いた中で小中一貫教育を私はしてはどうかと考えております。それぞれいろんな長所もあれば短所もあると思っておりますけれども、要は子供さんがいかに立派な青年に、大人になっていく。そのための義務教育をどんな形で提供するかということでございますので、そういった視点で、今、実際に中学校、小学校で検討していただいております。

それでは、そういうことの中で小中一貫教育についての現状。あるいは、今後につい

て、まず説明を受けまして、その上でまた御意見等を交換させていただきたいと思いますので、よろしくお願ひします。

○事務局

ありがとうございました。

続きまして、本年4月に教育委員会委員が交代されておりますので、改めて本日の総合教育会議構成委員を御紹介させていただきます。

まずは、先ほど御挨拶いただきました登市長です。

○登市長

登でございます。

○事務局

続きまして、衣笠教育長です。

○衣笠教育長

衣笠です。よろしくお願ひします。

○事務局

続きまして、教育委員会山名委員です。

○山名教育委員

山名です。よろしくお願ひします。

○事務局

続きまして、吉田委員です。

○吉田教育委員

吉田です。よろしくお願ひいたします。

○事務局

続きまして、神尾委員です。

○神尾教育委員

神尾と申します。よろしくお願ひいたします。

○事務局

続きまして、本年4月より新たに教育委員会委員に就任されました布施委員です。

○布施教育委員

布施です。よろしくお願ひします。

○事務局

以上が、本日の総合教育会議の構成員の皆様となります。

なお、事務局の出席者の紹介につきましては、出席者名簿をもってかえさせていただきます。

それでは、本日は全ての構成員の皆様にご出席いただいております。これから議事に入りますが、議事の進行は高砂市総合教育会議運営要領第4条の規定により、議事進行を市長が行うことになっておりますので、これからの進行は市長にお願いいたします。

○登市長

それでは、本日の議題であります。「高砂市小中一貫教育」の全市的な展開に向けてということでお話をさせていただきたいと思っております。まず事務局のほうから現状等について、説明をお願いします。

○大西教育部長

それでは、本日の会議資料の1ページをお願いいたします。「高砂市小中一貫教育」の全市的な展開に向けてというところでございます。

今現在、高砂中学校における小中一貫教育の取り組みの現状について御説明させていただきます。

この高砂中学校におきましては、平成26年4月から小中一貫教育を開始いたしてございます。残る5中学校区に関しましては、小中連携の強化を図ってまいってきたところでございます。

また、本年5月16日におきましては、高砂中学校におけるここ三年間の取り組みの総括といたしまして、市内の小学校、中学校の校長、教頭、主幹教諭、また、幼稚園、こども園の園長等、約70名に参加していただきまして、高砂中学校区移管教育報告会を開催いたしまして、高砂中学校におきましては3年間の実践発表をいたしまして、参加者に対して、一貫教育のノウハウ。また、自校及び自分の校区で生かせる特色についての参考としていただいたところでございます。

そして、資料に戻っていただきまして、具体的な取り組み内容といたしましては、1めざす子ども像の統一というところで、「仲間とともに夢に向かってたくましく生きる子供の育成」というところで、めざす子ども像を統一してございます。

そして、取り組み体制といたしましては、高校との小中一貫教育推進会議ということで開催いたしまして、高砂中学校区におきましては、その下に人権・道徳教育部会、生活指導部会、学習指導部会の3部会を設置いたしまして、その部会を開催し取り組んできたところでございます。

そして、3の主な取り組みの内容といたしましては7つ挙げさせていただいてございます。ここ3年間の実績として主なものを7つ挙げさせていただいてございます。

まず、推進組織の設置。合同で職員会議または合同の研修、また、高砂小中学校共通の生活目標の設定。生徒心得7カ条と高砂の場合は言うてございますけれども。

そして、相互乗り入れ授業の実施といたしまして、理科、外国語活動、美術の3教科で相互乗り入れの日を実施いたしておりました。また、五、六年生における一部教科担任制の実施をしてございます。

そして、合同行事といたしまして、遠足、体育大会等も実施したというところでございます。ほかもう2つありますけれども、3年間こういう形で取り組んだ成果といたしましては、児童・生徒におきまして、小中でのギャップがなくなっている。また、児童・生徒の学びに向かう力が高まってきた。

また、教職員におきましては、学習指導、生徒指導、児童生徒理解において意識改革が進んできたというところでございます。

また、この取り組みに関して、保護者様、地域の声といたしまして、中学生が小学生に関わっている姿を見て、小中一貫教育によってよい経験ができていると感じる。また、中学生の見本となる姿を見ている小学生は今の中学生以上にしっかり行動できると期待

しているという保護者様、地域の声もいただいております。

そして、その下でございます。次に、高砂市全体の取り組みに向けての現状でございます。高砂市共通取り組みの推進といたしまして、今現在行っている4つを挙げさせていただきます。高砂市学習のきまり「あ・じ・み」の徹底。また、「高砂計算検定」の実施、また、小中合同での道德教育の推進。そして、中学校へ向けた学びの連携。学びの連携といたしましては、具体的に4項目挙げさせていただきます。中学校から小学校の卒業生への春季学習課題の配付。中学生の先生による小学校6年生への授業の交流。中学校生徒会による小学校6年生への学校の説明。また、小学校6年生の中学校クラブ活動見学等の推進を行っているところでございます。

そして、2各中学校ブロックでの取り組みの推進というところでございます。高砂中学校以外の5中学校区におきましても、各中学校区におきまして、小中一貫教育推進委員会を設置いたしまして、また、その下に高砂中学校区同様に部会を設置いたしまして、小中一貫に関する取り組みをしているというところでございます。

そして、次の2ページをお願いしたいと思います。2ページにおきましては、全市的な高砂市一貫教育の全体構想をお示しいただいております。まず上段に、「高砂市小中一貫教育」とはという形で、高砂市小中一貫教育の考え方といたしましては、小学校、中学校の独自性を大切にしながら、子供の「学び」と「育ち」の連続性を踏まえた指導を生み出す指導システムであるというところでございます。全市的なこの小中一貫教育の推進方針といたしまして4つ挙げさせていただきます。学習指導要領をもとにした教育課程の編成、就学前小中を見通した系統性・連続性のある指導の実施、子供の発達段階に応じた指導内容と指導方法の工夫、地域の特性を生かし、全ての中学校区での実施という形の推進方針に基づきまして、全市的に取り組んだというところでございます。

続いて、この中間におきましては、小学校の6年間または中学校の3年間を通しての9年間で学ぶ力、また、あたたかい心の2本柱で中学校区内の小学校、中学校が一体となりまして、めざす子ども像に取り組んでいくという考え方でございます。

また、2本柱の学ぶ力、あたたかい心を育む基盤となりますのは、就学前教育とも繋いでいき、このめざす子ども像というのを達成したいというところでございます。

そして、下段のほうで小中連携教育、並びに「高砂市小中一貫教育」、または小中一貫教育（制度）についてという形で書かせていただいております。この一番右端の小中一貫教育（制度）ということに関しましては、平成28年12月26日付の文部科学省が策定いたしました小中一貫した教育課程の編成実施に向けてに関する手引きによる国の小中一貫教育の考え方という形で国の考え方といたしましては、小学校と中学校がめざす子ども像を共有し、9年間を通じた教育課程を編成し、系統的な教育を目指す。指定校の設置、特別教育課程の編成が認められているというところでございます。

そして、一番下段、左端の小中連携教育。これに関しましては、今まで高砂中学校区以外の5中学校区が取り組んできた連携教育といたしまして、内容といたしましては、小学校と中学校がお互いに情報交換や交流を行うことを通じて、小学校教育から中学校教育への円滑な接続を目指すという形で学校形態は今のままであるという考え方。そして、真ん中のところ「高砂市小中一貫教育」というところでございます。この「高砂市小中一貫教育」というところで、このたび高砂中学校区におきましても3年間の実績を積みさせていただいた中で、平成30年4月から既にこの高砂中学校におきましては、取り組んでいたところでございますけれども、小学校と中学校がめざす子ども像を共有し、指導の連続性、教育内容の傾向性を踏まえた教育を目指すという形で学校形態は現況どおりという形で、来年4月から残る5中学校区に関しましては、既に実施している高砂中学校区と同じ小中一貫教育の考え方に基づいて、「高砂市小中一貫教育」というのを

推進してまいりたいというふうに考えてございます。

なお、学校形態に関しましては、現行どおりという形になりますので、残る5中学校に関しましては、施設の分離型という形になるところでございます。

簡単ではございますが、説明は以上です。

○登市長

説明は終わりました。

先に私のほうから、お尋ねさせていただきたいと思えます。

2ページ目の「高砂市小中一貫教育」全体構想。これは今まで3年半ほど経過してま
すが、その間でこの全体構想に変更をする必要があったとか。直したとか。修正をした
というのがありますか。

○大西教育部長

このたび市長がおっしゃる全体構想という形のこの構想に関しましては、大きな変更
は加えてはおりません。

○登市長

変更はなしですか。3年半ほど前につくったその構想ですね。

○大西教育部長

はい、そのとおりでございます。学ぶ力、あたたかい心の2本柱でめざす子ども像を
育成していくという形です。

○衣笠教育長

ただ、この全体構想の中でよくお声を聞かせていただいたところで、連携と一貫の様
子がよくわからない。連携と一貫とどう違うのかという御意見もありましたので、下の
ところの制度についてという表などは付け加えさせていただきました。

それから、就学前のところではめざす子ども像に向かっていくところで学ぶ力とあたた
かい心。学習面と心の部分というのを。就学前というのは一つの遊びを通して体験を積
み重ねていって心と学びを鍛えていくということですので、分けるのではなくて一つの
ものとしての図に少し改めさせていただいたところが若干変わっております。基本的
にはほとんど同じですが、そのあたりは少し付け加えたり、修正を加えたところはござ
います。

○登市長

1ページですが、それぞれずっと取り組みされているのですが、5番に保護者地域の
声というのがあります。これはいい評価をしていただいている声をあげておられるの
ですが、例えば、批判的な声とか、あるいは問題提起された声とか、そのようなものはあ
りませんか。聞いていないですか。

○大西教育部長

保護者、地域の声、市長のおっしゃるそういう批判的な意見、お声というのは、こち
らのほうではまだ聞いてないというところでございます。この声に関しましては、県の
ほうからも視察に来られて、そのときも保護者の方も立ち会ったそのときの主な意見と
して書かせていただいているところでございます。

○衣笠教育長

追加で。高砂中学校区で最初に導入といいますか、小中一貫を始めた時期には、例えば、小学校一年生の子供さんの保護者はこういうことをして意味があるのかという疑問をいただいたという声はあります。小学一年生は関係ない。高学年になって中学校に行くときについては、ある程度意味があるのかなと思いますが、低学年は関係ないですよ。何でこんなことをするのですかという声はございました。

ただ、進めていく中で中学生の子供さんが小学校一年生にも登校時に優しい言葉をかけたりとかいう姿を見るにつれて、やっぱり一年生にもいいことだなというふうに肯定的な御意見をいただけるようになったというふうに聞いております。

○登市長

そうですか。高砂中学校の中で推進委員会をつくっていただいて進めていただいております。検討していただいております。保護者の声って聞いていますが、先生方はどう受けとめておられますか。

○衣笠教育長

先生方もある程度このことについての一貫教育については、連携でいいのではないかというお声が最初から多くございました。なかなか時間的に一貫教育をするに当たって、それぞれの取り組みのする時間が確保できないのではないかという声とか。または、やる意味がもう一つよく理解できないとかいう声が最初はございました。

ただ、これも保護者の方と同じようにやる中で、小学校の先生方が中学校の先生方の姿にふれて専門的な教科の学習をしておられるなということに少し啓発されたり、または、中学校の先生が小学校の授業に行ったときにきめ細かい授業をされているな。これは勉強になるなということに気づいたといいますか。そういうことがあって、徐々に意味のある取り組みだなということは御理解いただけるようになってきましたと聞いております。

○登市長

もう一つの立場で、生徒というのか児童。子供さんの受けとめ方というのはどうですか。

○衣笠教育長

子供たちも特に合同行事とか。そういうようなことをする中で中学生の子供さんはどっちかという。例えば、運動会が合同ですと。体育大会という形でやっていたのが、もう一つ合同でやることによって物足りなさといいますか。もっと活気ある自分たちが躍動するような感じのイメージがほんわかとした、ある意味温かい感じの運動会なんです。なんか中学生としては物足りなさを感じている生徒もおられたというふうに聞いております。

ただ、やっていく中で中学生の女子が五、六年生の女子にダンスなどの指導をする中で自分の役割というか。自分の自己有用感といいますか。自分も役に立っているという充実を感じて、それも子供たちの中でも受け入れられてきたというふうに聞いております。それも二年目後半から三年目ぐらいになってそういう声が子供たちからも聞こえてきたというふうに聞いております。

○登 幸人市長

高砂小・中学校で先駆的に先行してやっていただいておりますが、ここで挙がっている

のは小中へのギャップがなくなってきた。この中で中一ギャップと言われるようなそういったものもここには解消されているというふうに受けとめていいのですか。されているのか。少なくなってきたというのか。

○大西教育部長

中一ギャップに関しましては、高砂中学校、小学校からの連携の中で、中一ギャップに関しましては、小中一貫教育を始めたときと今現在では、中一ギャップを感じるという生徒は少なくなっているという事実でございます。

○登市長

全体的に見て教育委員会として、今三年半経っていますが、小中一貫教育については、どのような受けとめをされていますか。今は来年、4月全市的に全中学校で実施ということで言われましたので、その方向で考えておられると思いますが、今までの部分を総括ではありませんが、そういったものも含めてどう受けとめられておられるのか教えてもらえますか。

○衣笠教育長

やはり課題もありますが、成果が大きかったというふうに捉えています。成果としては、大きくは4つ考えております。一つは今言いました中一ギャップがなくなってきた。今までは、小学校は小学校で中学校は中学校で色々な生徒指導での問題があるとかいうことをそれぞれの学校で解決しようとしてきましたが、一貫を進める中で合同で先生方が対応したということができてきました中で、この中一ギャップというのが解消されてきましたので、これは大きな成果ではないかなと。

それから、小学校の子供さんが中学校の生徒さんの姿に憧れとか、目標をもつようになってきた。今の合同の体育大会などもそうです。その中でそういうふうな憧れをもってきた。中学校の子供さんは自分の役割とか、立場を自覚するようになってきたということで、これも自尊心といいますか。気持ちのよい挨拶もできてきたし、男女の仲もすごく仲よくなったと聞いておりますので、これも大きな成果ではないかと思っております。

それから、学校のほうで学力のところまでは本当に明確な形として結果は出ていないのですが、学びに向かう力。学ぶ意欲といいますか。そういうことはすごく育ってきたなど。授業中にしっかりと真剣な顔で見ている姿が見られるようになってきたということは、これも大きな成果だなど。やっぱり一番教育委員会で、私自身が感じているのは、教職員の意識が大きく変わってきたということが一番大きな成果ではないかなと思えます。合同の取り組みなどで小中の教師の距離がすごく縮まったというふうなことがあります。以前でしたら、中学校の教師が例えば、掛け算の九九なんか何でこんなことができていなのかという不満を言っていたようなこともありましたし、小学校は小学校で中学校に対して、こんなに丁寧にやっているのに中学校で雑な指導しているという不満が裏でごそごそとくすぶっていたという状況がありましたが、合同で話し合ったり、研修したりする中でお互いのよさを生かしていくことによって、子供の成長につながるんだというふうな気持ち、意識がすごく変わってきたというのが一番の大きな成果ではないかなと思っております。それを5中学校区でもそういったノウハウとか、成果などは生かしていただけたらというふうなことを考えております。

○登市長

最後にもう一つだけ、来年4月から他の5校も始めるということですが、高砂小中は

1 小学校、1 中学校で、そして、また、地域も高砂町という本当に条件的には一貫校にしても子供の顔も小学校、中学校もある程度見知った中での一貫教育だと思いますが、他の5校は全て2小学校あると。中学校のそばに小学校もないと。離れているということの中で環境が少し違うと思いますが、そういった部分での違いというのは克服というのか。新たな課題が出てくるとか。そういうことはないですか。

○瀧野学校教育室長

今、市長が言われるように全くほかの5中学校区とこの高砂中学校区の形態は違うのですが、冒頭部長のほうから5月の中旬に行われました報告会の説明にもありましたように、高砂で先行的にやっていただいた取り組みの中で、そのノウハウとしては生かせる部分が十分にあると考えております。その中で特に全体構想にもございますように、まなぶ力とあたたかい心というこの2つの知と徳の両方の部分において、9年間を見通した指導をめざす子ども像として設定してやっていくというところにおいて、教育長も効果の一つとして申しましたように、なりよりも教育で一番大事な人である先生の意識を変えていくことによって、子供たちにとって質の高い学校教育を保証できるのではないかとこのように考えております。

特に、これまでは小は小の6年間。中は中の3年間で完結していたところを9年間見通して小中一貫でやっていく中で、特に、出口の15歳のところの出口を見据えて取り組みを進めていくということで小中が一致してやっていくということによって、子供たちの学力を含めまして効果を上げていくことができるのではないかとこのように考えています。

実際、先ほど市長の質問の中にもございましたけれども、実際にやっておられる先生の中で聞いていくと、一つは、高砂市小中で9年間見通して、小と中がやっていくことによって児童・生徒の理解が大変深まってきたというようなこと。それから、生徒指導が大変しやすくなった。今まで、なかなか中の先生が小のところへ、まあ言ったら口出しをしたいとか、小が逆に中ということができなかつたけれども、その辺の生徒指導もお互いが意見をしやすくなってきたと。子供たち自身にとっても、今高砂市小中でも学習の方法であるとか、形態であるとかいうのもある程度スタイルをあわせながら進めておりますけれども、子供さんにとっても大きな小中での段差という意味での不安も少なくなってきたという実際に声も聞いておりますところで、実際にやっている中で、形態は違いますが、生かせるノウハウは幾つもあるかと考えておりますので、それを生かしながら、また各中学校ブロックでの取り組みも特色をつくっていただきながら進めていけたらと考えております。

○衣笠教育長

合同の運動会の話をしてしまいましたが、合同の運動会とか、合同遠足とか、そんな乗り入れの授業とか、そういうようなことは高砂独自でよそのところはちょっと難しいかなというふうには考えております。

○登市長

それでは、教育委員のほうから何か。行政のほうでもよろしい。この一貫教育で御意見等がありましたら、お伺いしたいと思います。

○山名教育委員

今、いろいろと説明がありましたが、僕もまだ聞いてないことで事務局に聞かないといけないことがあります。まずこの小中一貫をやって結局、三年半の間の成果は何が

あったかということを出てこなかったということ。今、言葉としては非常に主な取り組みはやっていて、その成果は中一ギャップとかがあったということですが、個人的に関しましては中一ギャップ。小中一貫、学校が隣でやるから、高砂小学校、中学校に関してはもともとからそういう中一ギャップというのは非常に少なかったかもわからない。ただし、違う意味での中一ギャップというのは当然あるので、学習に関しましては、それなりの英語教育が始まるとか、あるいは、算数から数学への教育方針が変わったときのそれなりのギャップはどここの学校でもあるので、それに対しての変化のギャップをうずめるためには、もっと小学校の中の間での結局英語教育のあり方をもっと充実したものにしなければならないし、理科、算数のそれなりの教育。いわゆる連携を図らないといけなし、今のところでは、理科と外国語、美術の教科だけですが、それに算数とか数学。それなりの連携のことを考えていかないとやっぱり無理があると。これはなぜかと。しなければならないのはどうしたらいいのかということになると。いわゆる連携というか。それなりに先生方の交互教育のいわゆる教師の派遣とかいうのをもっと時間を増やさないと。いわゆる増やさないとというよりも、今、まだなおかつ今までの小学校、中学校の枠の中からはみ出し方がいわゆる枠を完全につぶしきれてないという。意識改革があると言いつつも、いわゆる教科に対してのもう一つ協働で一緒にやろうという意識がもうちょっと低いのかなと。それがいわゆる学力向上につながらないので、実際、学力向上を言いましたが、小中一貫に関して話は飛びますが、保護者の方のイメージの問題もあったし、実際、まずしょっぱなが部長、あるいは、教育長が言われたように先生方のイメージ。いわゆるその辺がもっているようなイメージが全然、本当、先生は百人百様であって、結局どこまで本当に教育委員会がもっている方針に納得していたかということ。いまだに納得できていないところがあるかもですね。保護者の方に関しては特に何をどんなふうに行っているのかと。例えば、小中一貫のイメージといたら、進学校の小中一貫のイメージが頭についてきていて、そうするとやはり市長も言われたように、僕も実際には強く言っているのは、三年半行ったら学力の向上が得られたでしょうということ。得られた結果は出ましたかと思ったら、やはり「高砂市小中一貫」に関しては、まだ成果が得られていない。これは何でだろうと。そしたら、言葉として事務方的に、あるいは、言われている方は学習態度が向上したと。深く学んでいっているとそういう数値としてあらわせない。そういう評価につながっていろいろ報告されまじけれども、やはり僕は非常に結果を求めるほうなので、学力の検定でやはり改善傾向が出たのかどうかをはっきり示してほしいと。これはやはり出なかったのではないかと。それを改善するにはどうしたらいいかということ。先ほど言ったいわゆるもうちょっと中学校の先生も小学校の中へ入ってきて、あるいは、小学校の先生も中学校の、他の校の教育の連携をしかともっと密にして、時間を増やさないとだめだろうと。そういうのを常に思っています。だから、先生方の今の高砂市小中一貫に関しては普段顔をあわすことが多くなっているでしょうけれども、次の高砂市全体に関してのあり方に関しては、非常に難しくこの報告会で今言われました先生達に報告はした。その先生方も実際、考え方はどのような考え方をもっているのだろう。高砂中学校、小学校以外に、いわゆるほかの中学校区の先生方、小学校の先生方はこれに関して実際にどのような意識をもっているのか。僕は把握しておく必要があるのではないかなと。本当に言っているけど、どこまでやれるのかと。やっぱり否定的ないわゆる場所が離れているから、分離型だから、どうしても高砂の小中一貫とは違って、いわゆる他のところでは難しいのではないかと。いわゆる交通の便もあるし、場所の分もあるし、子供の行き来も非常にしにくいし、つながりがやりにくいと。

そしたら、これをどうすると思ったら、ただ、ただ、要するに、いわゆる今説明のあった小・中連携教育のいわゆる本当の連携だけで高砂の小中一貫教育と言っているのか

というところを結局、理解がもうひとつできていないし、僕自身も非常にこれはどのような形でしたらいいのか非常に難しいと思いますが、それで結局僕は本当に短絡的に結べていってしまうのですが、学ぶ力が増えて、結局時間のそれなりに確保どうのこうの。いわゆる学力を向上しなければならない。学ぶ力がついてきた。深める。いろいろ言っているが、小中一貫の中でもう一つ大きな部分が結局、子供らに勉強する時間を増やしてあげようと。余裕をもたそうと。いわゆる学校なら、学校で対応して、結局サポートできる、勉強がちょっと遅れている子、あるいは、家庭内で勉強しにくい子に関してのサポート体制みたいなものを充実しなければならないし、ふだんの日常の中で結局、子供らが余裕をもった時間を持つために、そうすれば勉強する時間も出てくる。要するに、多分、後々の話になるかもわかりませんが、クラブ活動の問題も含めて結局どうしたって、小中一貫で学力を上げていくためには、子供の勉強をできる時間帯を増やしてあげないと何の余裕もない。ほかのこと。いわゆる余裕ができればいろいろな社会情勢にいろいろ。新聞も読む。あるいは、テレビでニュースを読む。そういったいろいろなことを考える時間ができてくれば、結局それはそれなりのグローバルな形のいろんな形のいろんなことを考えていけること。それを今、いわゆる締めつけた形で時間の余裕のない生活を送らせるような中学生生活。それを改善するにはどうしたらいいのか。これも小中一貫の教育の中の一つの大きなテーマで残ってきていると。その改善を一緒にやらないと高砂の小中一貫。それで学力向上を来すことは難しいのではないかということがあるので、いわゆるあともし話があるということでしたが、クラブ活動の制限の問題とか、そういうのをいろいろ。先生方もやはり余裕をもった時間をつくるためには、ノー会議デー、ノークラブデー。そういういろんなことを高砂市一斉に動くようなこと。各学校がそれぞれの校長に言ってもだめなので、教育委員会全体、あるいは、市全体で結局やりましょうということをしちんと決めて、それなりに保護者にそういうことの意味を周知徹底、小中一貫、あるいは、結局、学力向上に対しては、やはり子供に時間をつくらなければならない。そのためにはそういう学力のこともあるし、実際に健康上の問題に関して非常に今、今日みたいな暑い時期であったとしたら、暑さ指数から言ったら、今日の朝、ちょうどネットで見てきましたが、暑さ指数は今日で既に25ぐらいあって、12時から暑さ指数がほぼ30近くになりますよ。そうすると暑さ指数30と言ったら、普通の生活をしていてもじっと家にいて普通の生活をしていても熱中症にかかる確率の危険性のある指数ですよ。それをクラブ活動ですると今の状態。例えば、昼から30を超えた状態でクラブ活動ですると。体育館の中でやったりしたら体育館の室温が35度を超えている。そうしたら、暑さ指数がいくらになるか言うと優に30を超えて危険。いわゆるこれは明らかに運動はやめましょうという領域になりますよね。そういうのをきちんと健康の管理からも十分そういう暑さ指数。温度計を各学校に設置してもらっているのですが、体育館だけで外でやっている分にはわからないし、そういうきちんとした表示を守ってそれに対するリスクマネジメントとして、していくということ。これもやっぱり中学校のクラブだけでなく、学校の中でもいろいろしていかなければならないし、これに関しては環境改善。多岐にわたって言いますが、環境改善に関してはやはり勉強の時間を増やすためには前から言っているように、各教室にはクーラーをつけていただいて、勉強時間を増やすということが大事だろうと思うし、それが学力向上につながる。そうしたら、要するに、子供の学ぶ環境を本当に改善するための市長にお願いして、夏休み短縮して授業を増やすためには環境を整える。そうしたらどうするかということがいろいろ出てくると思うので、言い出したら切がないのでこの辺にします。

○登市長

ありがとうございます。

まず、小中一貫のほうから、クラブ活動については時間があれば、また後でさせていただきたい。エアコンについては、ちょっとこれから申し上げますけれども、入れる意思はございますけれども、なかなか財源を探しておりまして、国の財源もほとんど国の補助金がありませんので、大部分が市の負担となりますので、金額にして二十何億でしたか。

○大西誠教育部長

23億。概算になります。

○登 幸人市長

23億。教育部長はいつもさらっと言いますが、23億円は少し大きいので、この分についてもやりたいですが、なかなか踏み出せないというのが実情です。これももう少し待っていただけたら。先に給食センターと。学校給食をやろうということをやっています。

ただ、よく言われています。今、こども園で梅井の話をしました。今度は曾根と米田のこども園化にしようとしています。そうなりますと今の幼稚園は全部エアコンが入ります。エアコンが入っていないのは荒井だけになりますので、これはまた、荒井と幼稚園と保育園をどうするのかという問題が残っているのですが、荒井についてはそこら辺の整理をした上でできるだけ荒井幼稚園にエアコンは入れたいなというふうに思っています。また、エアコンについては後ほどさせていただきます。

それでは、小中一貫の中で学習形態かな。先生の異動というのか、流動性というのか。交流というのか。それをもっと拡大してはどうかというのと。小中の効果。特に学力の面ではどうだったのかというお話。それと、他の5校。高砂市小中でやっているものがどこまでそのような形で浸透していくのかと。普及していくのかというのが見えないなということなのですが、それについて。

○神尾教育委員

小中一貫教育の取り組みは、全国的な流れでもあるし、必要だと思いますし、やっていくべきだと思っています。

それから、高砂市小中学校がここ三年間にわたっていろいろな取り組みをしていただいて、それはパイロット校として、これからの小中一貫の取り組みに非常に役に立つなということも感じています。

ただ、2点ほど申し上げたいのですが、一つは施設一体型の高砂小中学校と他校は、当然、皆さん御存じのように環境が明らかに違うので、全く別物として考えないとだめだろうなと思います。特にいろいろ小中一貫の効果。高砂小中での取り組んだ成果、効果というのは説明のあったとおりだと思うのですが、このベースになっているのは、小中一貫の本当の基本である交流ですね。生徒児童の交流、教師の交流。これがまずベースになっていて、それができていての効果、成果という割合が非常に高いと思うのですね。ですから、これが非常にポイントかなと思います。ただ、それを他の5校区でやるとなると非常にこれは難しいのですね。他の5校区も小規模ではあるのですが、小学生は中学校に行ったり、中学生の教師は小学校へ行って出前授業をやったり、こういうことはしているのですが、これは断片的なもので年数回のことなので、余り大きな効果は期待できない。ですから、その辺をどうやって考えていくかということが大切かなと。

この資料にありますように、めざす子ども像を共通認識してやっていく。これが本当

に大事なことで、それを今度はそこまでは当然わかるのですが、それをするためにどれだけ今度は教師が会議とかなんとか。例えば、中学校の教師は空き時間とかあるので、小学校の授業を少し見に行き、そういう時間を決めないで空いている時間に見に行く。小学校の先生はなかなかできないけれども、空き時間がいくらありますから、自由にいつでもオープンスクールの状態で中学校の教師が現場を見に行くことで授業のいわゆる学習規律とかが実感できる。そういう細かいことを。そういう仕組みをどれだけつくっていけるか。やっぱり交流するための仕組みをどれだけつくっていけるかということが大事だと思います。

ただ、中学校の現場教師にすると、これから新学習指導要領が始まるし、小学校からすると英語の低学年化があるし、道徳の教科化があるし、いろんなことで目の前の業務、職務に追われている面があるから、今の僕の感覚で言えば、小中一貫への取り組みはある程度3年間の高砂小中の取り組み、先ほどの報告会等を見て、ある程度、他の5校の中学校の教師も方向性は見えてきたので少し一安心しているというか。あとは具体的に何をしたらいいのだろうかという部分で少し落ち着いているような気がします。激励訪問に行ったときもそんな感じがしたのですが、小中一貫制の必要性の気持ちは持っているが、やや気持ちとすれば、数年前までの熱はないなど。気持ちが落ち着いているというのは方向性が見えてきたことによることかなと思っています。それと、ほかの業務にいっぱい追われているかということがあるかと思っています。

ですので、それをどういうふうな仕組みをつくっていくのが大事かなと思うのが一点と。もう一点は、小中一貫が学力向上の切り札とか、特効薬のように思われがちですが、僕はそう思わないですね。学力向上は一つの手段であって、もともとは小中ギャップの解消、いじめ、不登校、暴力行為。これを少なくすることで結果的に学力向上につながるということだったので、それがだんだん小中一貫をすれば即効学力向上というなんか神話ほどではないですけども、なんか特効薬みたいにだんだんできてきているので、そうではなくて、教師の授業の改善だとか、学級対応の力をつけるとか、家庭学習。先ほど山名先生がおっしゃった家庭学習が一番大事で、これは全国学力学習状況調査でもずっと前から高砂市の家庭学習は少ないですね。ですから、保護者と協力して、中学校でどうやって課題を出して家庭学習を増やすかとそういう具体的なところが今即効性のある部分だと思いますので、ずっと一体化して学力向上に取り組む。結果として小中一貫は大きな手助けになるが、それは結果として手助けをしてくれるぐらいの感覚でいかないと、なかなか現場も苦しいのかなと。小中一貫により学力上がりましたか、数値を出してくださいと言われてもね。その分が苦しいのかなという気がしています。

以上です。

○登市長

ありがとうございます。先に意見をいただきましょうか。

○布施教育委員

私は小中一貫で期待することは、やはりその学校の魅力が十分に浸透して、そこに生徒がどんどん集まるということが一番やっぱり望ましい形ではないかという。それが保護者たち、子供たちが何を望んでいるかというところがまたそこでポイントとなってくるのですが、市長がおっしゃった知を上げて徳を得るということは、やはり皆さんも思っていると思います。特に、企業に勤めている方々が高砂市から離れて姫路、加古川に住んでしまうという現状を見る限りは、やはり高砂市には何か足りないところがあると。その中でも特に学力評価テストの結果でもいいとは言えないと思っています。

あと進学率ですね。最終的には将来子供たちの未来を考えたときに、よりよい生活を

送ってもらうためには、やはりよりよい学校に行ってもらいたい。進学率をそのために上げる必要があるのではないかという。小中一貫で掲げている目標というのがめざす子ども像というのがありますが、具体性がないような気がします。例えば、全国学力テストでどのレベルまでもっていきこうという先生たちの意識があれば、そっちのほうでの取り組みもあるかもしれませんし、学校自身もそういう方向性をもっていけるのではないかと思います。進学校にしたら、小中で行ったならば、高校の例えば、加古川東高が今この地区では最難関で進学率も非常に高い。そこに何人の生徒たちが高砂市から行っているとか、小学校卒業段階では私立の中学校に行きます。高砂市には一つ白陵中学校という特に全国的に優秀な学校がありますけれども、そこに高砂市から何人行っているかと考えたときに、私が知っている範囲で白陵中学校には1, 200人の生徒がいながら、たった50人しか生徒が高砂市からは行っていないんです。小学校でいうと一学年に一人ぐらいしか行っていない、それにかかわらず姫路から二、三百人、加古川からも二、三百人という現状段階を見てもこれはやはり学力の面ではかなり遅れをとっているかなと思います。

そうするとやはり世帯としては、学力のいい、レベルのところに通える地区に住みたいかなと思ってくるはずなので、中学も含めたところでのレベルアップをしてもらって、かつそれが宣伝できる。例えば、父兄関係のロコミだとか、またはそういう市から出す宣伝力とかがあっては、非常に小中一貫ができてよくなった。ここに行きたいよと。魅力の学校だ。それも高砂市全体で取り組むのだったなら、高砂市というのは非常に住みやすいまちになるのではないかなというふうにそれも期待できるのではないかなと思いますので、具体的な目標というのをもう少し設定したらどうかというのは。先生の意識もそうすると変わってくる。会社などで目標がないままでこれをやりましょう、あれやりましょうといっても、結果は結局出てこないですね。何かの目標があって、それに対して進捗をフォローしていくことによって、やはり結果は伴ってくる。そういう段階に進めたらいかがでしょうかというのが私の意見です。

以上です。

○登市長

ありがとうございます。吉田さん、何かありますか。

○吉田教育委員

私は、布施さんと全く視点が裏側になってしまうかもわからないのですが、今、小中一貫ということに対して、まず学力を上げるというそれだけ为目标にするのであれば、9年間の達成目標に向けてのカリキュラムをつくって、それに向けて徹底的に学力別にクラス分けして指導していけば絶対上がると思います。だけど、そういうことではないと思うのです、義務教育というのは。子供たちがこれから何十年間生きていくための基礎をつくっていくところなので、もちろん学力がない子はかわいそうです。はっきり言って。自分の夢も絶たれてしまいますし、かわいそうなのですが、子供って小中一貫教育という四本の柱です。教育目標の一貫、学習内容の系統性、指導の継続性とかいうのですが、与えることばかり考えてしまっても子供って動かないですね。子供がどういうときに能力が伸びるかというのをよく考えるとやっぱり集中力があるとき、興味をもっているとき、そういうときってやっぱり伸びると思うのです。集中力は何が欠くかというやっぱり不安だったり恐怖であったり、なんかそういうことが子供の集中力を欠くし、物事への興味がうせると思います。そうやって考えていくとやっぱり知らない人が多いところは不安ですね。子供は。だけど、周りに知っている人がいっぱいいて、理解してくれて、認めてくれていという状況だと子供は安心して能力が伸

びると思います。そういう意味では小中一貫の中で共通理解というのを9年間先生方がしてくださって、一年生で入ってきたあの小さい子から知ってくださって、中学三年生までその子を見てくださる。子供にしてみればずっと同じ人が自分を見て理解してくれているということは、非常に子供にとっては安心して学習できる場所になるのではないかと思います。そういう意味で相手を受け入れる、受け止めるということをもっと力を入れてやっていけば、やっぱり成果は出てくるのではないかなと思います。

そういう意味では、高砂校区で小中一貫をやったというのは、逆にその成果が出にくい、一番出にくい場所を選んだのかなという気もするのですが。もともと町内の人にはよく知っていますし、子供同士。ですから、かえってほかの地域で違う小学校2校から来ますとか。そういう状況の中で逆に中学校の先生たちが小学校一年生のときから顔を知っている。急にあの子、伸びたな。今だな。今教え時だなみたいな感覚を持ちながら見てくださっているというのは、小中一貫としての本当の意味を発揮してくれるのではないかなと。ある意味では期待しています。

ただ、そのためには、先生方が本当にそういう子供たち一人一人に目を向けて、個を伸ばすという意識をもっていただかないとなかなかできないと思いますし、今、ここで教えなきゃというタイミングを本当に子供を見て計ってくださるような先生方、それから、そういう先生方に時間をもっていただくとか。そういうことがこれから個に向けての教育というのが大切で、例えば、親にしても一回、3年生のときに割り算を習って、理解できないまま4年、5年、になったら、一生割り算に戻れないですよ。今の教育だと。だったら、塾に行く。塾に行っても、集団のクラスに入ったらできない。じゃ個別みたいになってくるので、ある程度経済力がなければその子には割り算は教えられないような世界なので、9年間でこの子はここでつまずいているなと思ったら戻ってもらえるような。この子はここさえできたら先に続くから、じゃここちょっとだけ教えてみようかなみたいな教え方をしていただけるような一貫教育ができれば、絶対落ちこぼれがなくなりますから、底上げをすれば絶対学力って全体に上がってくると思います。伸びる子に対してもこの子絶対もっと伸びるからというので、個別にいろいろ課題を与えていくとか。そうしたら、絶対学力は伸びると思います。そういうような小中一貫、9年間ができればいいなと心から思っております。

○登市長

いろいろ意見が出ました。全体でお答えしていただけたら。

○衣笠教育長

貴重な御意見をたくさんいただいたなということでメモさせていただいたのですが、まず一つは、学力の面につきましては、本当に一つは全国学力学習状況調査の結果というのを重く受けとめたいというふうに考えています。その中で高砂の小学校、中学校を見たときには、中学校は全国よりも言っているのかな。ほぼ同じかちょっと上ぐらいのところ伸びてないです。でも、そのぐらいの。小学校は結構、四年間をずっと見ていきますとすごく伸びてきている。数字としてね。特にA問題というか、基礎的なことについてはすごく成果が出てきているのは目に見えて出ております。

でも、今神尾委員がおっしゃったように、これを言いわけにははいけないのですが、小中一貫というのは特効薬という意味で学力に反映していくんだという考え方はやはり少し改めて、じわじわと効く漢方薬の感じで効かせていかないといけない。学力の向上としてそれはそれで小中一貫とは別ではないですけども、それとはまた違った形で取り組んでいくというのは大事な。平成17年に高砂市は予算をたくさんいただいて小学校二年生から中学校三年生の悉皆調査を独自で高砂市がやりました。そのときの課題

は4つありまして、一つは、小から中へ行ったときの時点で学習意欲とか、理解度が低下していると。これには小中一貫をきちんとやっていけないというのが一つの方法としてあらわれていると思います。

それから、家庭学習をしない子が5%から15%。これは家庭での学習習慣、生活習慣をきちんとやるべきこと。それから、国語とか算数の読解力であったり、概念の課題が授業をしっかりと組み立てていくということが大事と。もう一つは、山名先生がおっしゃったように、学習の内容が十分理解できていない部分は授業時間をしっかりと確保していくこと。この4つは学力の向上の問題としてしっかりと小中一貫とは、また違った形でのアプローチは必要だなと思っております。数値目標についても結構高砂市においては全国よりもプラス5、高砂のアンケートでは授業は楽しい学習ができていると思うものを95%にしようとか。進んだやつは指標を100にしようとか。そういう目標は一応立てて取り組んではおります。

○登市長

そのほかのことで特に目標、具体性がないとかいう御意見もありましたが。

○衣笠教育長

今言いましたように、ある程度ぼやっとした目標ではなくて、めざす子ども像というのはきちんと目指す子供として、中学三年生を卒業した姿を思い浮かべながらやるのは大事ですが、今私が申し上げましたように、数字的な目標もやっぱりしっかりと示して、それに向かってやるということは一つ大事かなというふうなことです。アンケートの結果でこのぐらいの程度の子供の意欲が高まったというふうな形を100%、95%、または全国学力学習状況調査の結果をプラス5とか。そういうようなこともやっぱりきちんと明確にすることによって、目標があれば先生方も意欲も出てきますので、それは大切なことだと思っておりますので。

○布施教育委員

よろしくをお願いします。

○山名教育委員

結局、小中一貫の一貫の中で、結局学力の向上が全面的に出てません。最初、いわゆる高砂市小中一貫をやろうとといったときに、言葉として学力の向上と入っているのは事実ですよ。結局、それが何かと言ったら、過去のいきさつで僕なりの理解としては、高砂小学校、中学校のいわゆる人口。生徒、児童数の減少があって、廃校に追い込まれるかどうかということもあって、結局そこいわゆる小中一貫のそれなりの体制を導入することによって、他地域からの他中学校からの結局そこへの編入があったとしたら、小学校、中学校の存続が保たれるのではないかということがあった。そのときに魅力ある小中一貫の教育というのを保護者、あるいは、市内の方々にアピールするために何が大事かということになったら、いわゆるめざす子ども像としてのあたたかい心とか、そういう地域の中と言ったって、地域の中、よそからくる子に地域の中というのは非常に難しいところがあるし、学ぶ力、それなりの目に見えないもの。いわゆる実際には徐々に徐々に蓄積されて、結局それが行く行くは学力向上という形が得られればその評価が上がる。それなりに達する。数字としては学力検査の分が上れば本当はいいのですが、それはじわっとした感じで徐々に上がっていくだろうと。

ただ、ここ三年間の評価として、そうしたら、どうだろうということになったときに、この前も学校訪問したときももう一つ効果が如実な形で出てこない。そうしたら、ほか

のところへの小中一貫をやるに当たっての結局、進めるとしても、高砂市小中一貫は非常にやりやすい特殊な事情の環境のもとでやる小中一貫。非常にほかのところと比べてやりやすい環境の中でやったもののどれだけの評価が得られたのかということ。成果が得られたかということになると。若干評価が低いのではないかと。評価が低くなってしまっているのではないかと。ほかの市内の方々も分離型の小中一貫の中でやろうと言ったときに、「高砂市小中一貫」であれだけひつついたところでやって、その特殊な地域の中でやっている。でも、出ないのに、どれだけのことを期待するのかということになったらね。その煩わしさ、先生方の僕は代弁をするわけではないですけども、僕は意見を聞いていませんが、やっている小中一貫。今よりも今の過密な教員生活の中での時間の中で、さらに連携、あるいはそれなりの小中一貫に向けてのやっていくことに懐疑的な気持ちになったりしたら、協力が得られにくいだろうと。そうしたら、積極的な形でモチベーションをもって携わってくれるかということになると難しいなど。何かあるもの。吉田さんに言い訳じゃないけど、全てが学力向上するための。全て全面的に出しているわけではなくて、全面的に出すのであれば、スパルタ教育をやればいいんでね。塾的なことをやれば済むことで、でも、違ういろんなことをやっぱり大事だということがあるので、ただし、ある程度、一回は言った学力向上というものをやはり打ち出したことがあるのだったら、それなりの成果は出して欲しいという気は十分あるので、やはりなんかもうちょっと成果を出してほしいという本音ですよ。三年間やってこれだけやりやすい環境にだったら、もう少しそろそろ結果出てほしいねという。それをほかのところへ拡大するに当たっての非常に効果がある。いわゆる子供たちの生活も変わるし、気持ちも変わるし、今言われた知、徳の徳がどんどんどんどんやはり変わって暴れる子もいない。いわゆる不登校も減ってくる。あるいは、それなりの地域の中で子供たちの生活態度が変わってくる。いろんなことが波及して出てくるということ。やはり期待しているから、やはりそうしたら目に見えたのは学力がもう少し上がってほしい。言葉として出すから前面に出て。あくまでそれを言っているわけではなからね。私学の、あるいは、受験校、専門的なそういうところのそういう学力は当然望まないのでも僕も思っていないよ。もう少しやはり結果がほしいなという気はつくづく思う。

○衣笠教育長

結果は出ています。

○衣笠教育長

山名先生、大変厳しい御意見で身が引き締まる思いで聞かせていただきましたが、ありがとうございます。

ただ、結果は本当にじわじわですけども出ております。今先生の意識という。教職員の意識というお話もございましたが、先生方もこの高砂の取り組みの報告会をしたときに、結構、いい取り組みなのでやってみても値打ちがあるなというふうな意識にかなり私は変わってきたなというふうなことを実感しておりますので、もうぼちぼち他の校区でも連携ではなくて、一貫教育を進めていく時期にきているなということを感じておりますので、やろうかということですし、高砂の取り組みの成果を聞く中である程度結果が出てきているのだなという感じておられる先生が多くなってきているので、さらにこれを進めていきたいというふうには教育委員会としては捉えているんです。

○神尾教育委員

私も教師が、少し一安心というか、気持ちが落ちついているなという表現をしたのですが、よく小学校の文化、中学校の文化ということをよく使っていたのですが、本当に

それがお互いの文化を上手に取り込んでそういう顔が見えてということがすごく大きいですね。現場にいとね。だから、顔が見えるというのは、教師同士の顔が見えて、それを通して子供の顔が見えてくるということで、それがすごくよかったなと思っていて本当にいいと思います。それは何がどこでできたかというこの小中一貫の取り組みがベースになってできているので、その分で本当に気軽にお互いに、これができていないのは小学校のせいだと。親がしっかりしていないと中学校はどうしているのかみたいなそういうのが本当になくなって、いい感じ、いい雰囲気になっているなど。小中の職員の関係ね。そういうのは本当に思いますので、それは大きな成果かなと思いますけどね。

○登市長

学力向上でよく今言われていますが、私も一番最初、小中一貫。一つの目標というのは学力向上がありますよと言いました。現に私はそのように考え方を持っています。だけど、学力の向上をどう捉えるかなのですが、私が申し上げたいのは、私の学力向上というのは、何も点数至上主義で成績至上主義ではないということです。

それともう一つは、きちんと理解できていない子供さんがおられると思います。ですから、その子供たちに例えば、学校の中で補習授業をすとか。その子供たちを少しでも習熟度を上げていただくような取り組みをしていただければ、全体がレベルアップしていくのではないかと。それも一つの学力の向上だというふうに思います。

それから、本当に勉強したくて、もっともっと知識欲があって伸びたいと。伸びたいという子供にはレベルアップした教育もその中でしていただければ、結局その子供さんに応じた形でいかに学校の中で対応していただけるか。そのことによって、結果として例えば、その学校の平均点が上がるとか。あるいは、その子供さんが先ほど言われましたが、意欲がなくなるとかそういうことも解消していくのではないかなというふうに思います。

もう一つは、私は、学力そのものは総合力ですから。何も英語だけできたらいい。数学はできなかつたらだめな子だと。そういうことではないと思いますので、総合力の中でその子供がどうやって生きていくのかという力をつけていこうと思いますので、ですから、結局は学力のすぐれた子供さんというのか。やっぱりその子供は何事にも積極的に好奇心をもち、また、それに探求心もあつたりとか。自分で学んでいこうとする力は自然に持っていると思います。

それから、もう一つは、知ることによって今度は考える力もまた出てきます。考える力はポキャブラリーで考えますので、やっぱり基礎となるのは国語だと思います。国語もしっかりと勉強してもらわないといけません。そのような考える力も身につくと。最終的にどうそれを結論として求めていくのかという判断力も当然に発揮できる要素。学力をもっていると思います。それから、行動力というのか。行動に際してもこれがいいのか悪いのかという是非の判断。そういったものももった上での行動もしてもらえるそのような要素をもった僕は学力だと思いますので、そういう全体力としての私は学力を求めたいというふうに思っています。

もちろん一つの指標としては、全国学力テストというのがありますから、テストをする以上はいい点をとってもらいたい。これは誰しも思っていることで順番は何位でも構わない。その子がそれで満足していただければいい。それでは私はその子が本当に伸びる子かどうかというのは、学校が伸ばしていないのかもわかりません。それでいいということの位置づけにしてしまったらね。やっぱり向上心をもっていただかないといけないということでございますので、一つの指標としてそういうランクづけ、あるいは、位置づけというのは出てくると思うのですが、それはそれとしてしっかりと受けとめて、やはり少しでも上位を目指していくというのは、私は大事かなというふうに思っています。

そういう意味合いでの学力ということで私も申し上げております。

○山名教育委員

市長の言うことは非常にすぐわかるのですが、結局、僕は今最初に言ったように、時間の余裕を持たしてほしいと。結局、勉強のことも家庭学習、あるいは、それなりの違うこともできる。そうしたら、結局、あらゆることに関して関心をもってほしいという。いわゆる持つ余裕をもってほしい。いろんなこと。例えば、今回の選挙にしたっていろんなことに関して、個人、小学校のときから、あるいは、中学校になったら、社会で起こっているようないろんな現象を知って、それに対する自分で判断をして自分の意見をもつということ。それがやはりいろんなことに関して興味をもって思考を深めていけるし、それはなぜだろうということになってきたら、どんどんどんどんいろんなことを勉強しなければならない。

結局、思考力を深めていくこともあるし、きちんとした自分なりの意見。関心をもって意見を述べられるような状況をつくってあげてほしいです。そうしないと知らない。興味ないという感じでは、結局あらゆるものに関しての能力が伸びないので、それがやはりトータルのいわゆる国語力だろうし、例えば、今だったらすごい略字の多いことだったら、それは何だろうということの興味をもっていく。それに対しての考え、一つ一つ見ていったら結局それが深めていける学習だし、そういうことで話し合っ、結局意見を言えば、お互いのコミュニケーションがあるし、それをいろいろ戦わせていくことをどんどんその子の能力というのが上がっていく。やっぱり一つのことで走るのもいいでしょうし、結局それなりのあらゆるものに幅広く興味をもってそれぞれに僕は理想としては、全てのものに関してちょっかいを出せる。僕からの最後の質問でいろんなことに、こんな一つにしたって、何でこんな紙の模様もないのだろうかというそういう茶々を入れるぐらいのね。それぐらいの気持ちがあってね。ここの中だったらしばらくしたらべちゃっとなってきた悪いコップやとか。値段が安いとか。いろいろそんないろんなことを考えていくそういう子供であってほしいと僕自身は自分がそうであるから、そうしたら、本当に勉強しなければ仕方がないし、文句を言うためには茶々を言う、いろんなことで意見交わすためには、知っておかなければいけないことがいっぱい出てくる。そういう意欲をもつ。だから、時間的余裕をつくってあげてほしい。あらゆることにふれられる時間をつくってほしい。いわゆる昔のいけなかったのは、何回も言いますけれども、今はありませんが、高砂はクラブ活動で子供を縛りつけて、非行をさせないために、外に出歩かせないために、中学校のクラブ活動がある時間まで延々とやって、帰ったらバタンキューで外に出さないそういうクラブ活動をしようというそういうことが巷に広まっていた。そういうふうに行われているという。風評ですよ。そういうのがあったりね。時期がなかったですか。結局それは子供の発育。いわゆる学力、いろいろなことに対して、人間形成に関しても大人の間違った考え方でいっている縛りであって、いわゆる一種の虐待に近いと。そういうことを教育の中で過去にやってきていた反省もあるから、子供主体でどのような形でしたらいいかということになったら、いろんな時間をつくってあげられることがまず。フリーに考える時間を指すことが大事かなと思います。

○登市長

小中一貫の一部かも知れませんが、山名先生のほうからクラブ活動という提案もされていますので、そちらへ入らせていただければよろしいですか。

クラブ活動の今の状況だけ簡単に。

○大西教育部長

今、お手元のほうに資料をお配りさせていただきます。平成29年度の各中学校における運動部及び文化部の参加現状でございます。平成29年度が始まった中で各中学校におきましての運動部。裏面に移りましては文化部の男女別の参加人員という形で、学校によりましては、教師の関係で部活動。ほかの学校にあってもない部活動があるというのが実情でございます。そういう中でこの平成29年度におきましては、6中学校の中で全児童の運動部に入っている割合といたしましては、全体の64.7%の生徒が何かがしかの運動部のクラブに入られているというところでございます。また、裏面におきまして平成29年度の文化部の実態といたしましては、全生徒に対して20.8%、517人の生徒が文化部のほうに入られておるという中で、運動部、文化部合わせましてトータルといたしまして、クラブ活動加入率は平成29年度につきましては、全体の85.5%の加入率であるというところでございます。

年々、若干運動部の参加人員が変わっていますが、平成29年度におきましては、85%の生徒がクラブ活動に参加し活動されているというところでございます。以上でございます。

○登市長

ありがとうございます。先ほど山名先生が言われたように、高砂の特徴として遅くまでやる。徹底的にクラブ活動をやって非行をさせないとか。私は、それは逆かなと思うのですが、結果として非行を防いだりいじめを防いだり、また、多くの仲間意識で醸成していくというような。結果としてそういうものが求められたというか。あったのであって、そのためにクラブ活動を徹底してやったということではないのかなというふうに思うのですが、それはどうですか。

○衣笠教育長

私も市長と同じ考えです。市長のおっしゃるとおりだと思います。中には山名先生がお聞きになられた情報のような考え方の方もおられるかも知れませんが、学校としてはそういうクラブ活動をして、心も体も鍛える。また、文化部では形式的にこういった感じになるという中で非行の防止というか。そのことにも反映しているというふうな捉え方でクラブなんかは考えておりました。

○登市長

文科省から何か通知も来ているのでしょうか。クラブ活動について、週一回ぐらい休みなさいとか。

○大西教育部長

最近きた文科省の通知は、外部指導員クラブ活動に関して、活動できますけどという趣旨でございます。そして、申し訳ありません。資料では説明させていただきましたが、先ほどの議論の中で部活動の実態といたしまして、当然、朝の練習、また放課後の練習というのがございます。朝の練習といたしましては、学校におきましては、7時20分から7時30分から始めまして、終了が8時ということで約30分のクラブ活動の練習を行っているという実態でございます。

また、放課後に関しましても、5時間目までのところでしたら、夏場、冬場、当然夏場のほうが遅くまでやる。冬場のほうが日が暮れるのが早いという形で、大体5校時までのときは15時から18時30分まで夏場は行います。冬場に関しましては、1時間早く終了し、17時30分で終わるというところでございます。6時間目まである日に

おきましては、スタート時間が16時。1時間遅れます。終了時間は夏場は18時30分、冬場は17時30分。要するに5時半、6時半でクラブ活動は終了するということをごさいます。

そして、こちらのほうといたしましても、クラブ活動ノークラブデー。部活がない日に関しまして、各学校とも設定していただきまして、日曜日、土曜日、または平日に関してもクラブ活動のない日を設定していただいて、それに向けて完全実施とかいう形で取り組んでいただいているということをごさいます。年々、ここ三年間におきましては、ノー部活デー、要するに、クラブ活動のない日の設定をして、またそれが実施できている学校に関して増えてきているという実態をごさいます。

以上をごさいます。

○登 幸人市長

今、クラブ活動でよく言われているのが、どちらかと言えば、先生の過重労働に焦点を当てて、あるいは、指導する先生が少なくなってきたということで外部から指導者を入れろとかいう話になっているのですが、それも一つの私は大きな課題だというふうに思います。もう一つは、山名先生が言われたのと同意見なのですが、子供のほうに焦点を当てて、学校に行ったら勉強時間よりもクラブ活動する時間。年間時間でもよく言われていますが、クラブ活動は大体年間で700時間から1,000時間。学習はそれの7割か8割。ですから、学習する時間よりもクラブ活動をする時間のほうが1年間で長いというような数字も見たことがあります。ですが、それが本当の中学校生活かなど。やっぱりクラブ活動偏重になってしまっているのではないかなというふうに思います。

もう一つは、余裕という言葉で言われましたけれども、本当にそのとおりで週に1回ぐらい休ませてあげてもいいのかなと思いますし、土曜、日曜も休ませてあげても。休みたい子は休んでもいいのと違うのかなと。ただ、なかなかこれが子供の中でも世界でも難しいというふうに思いますが、ただ、これも山名先生が申されましたが、教育委員会がそこは週に1回休めとか、土曜、日曜はどうするかというのは教育委員会が方針をつけてあげないと、各学校で、各指導者、先生の指導者に任せて指針はこうですよと自分で考えなさいというのはなかなかできないだろうと思います。難しいだろうと思います。そこは私も思いますが、教育委員会がしっかりと方針として出すと。この方針でやりなさいというのがいいのかなというふうに思います。ただ、子供さんの中にも先生の中にも、クラブ活動は中学校生活の最大の目的というのか。目標だというふうに思われている方もやはりいらっしゃいますので、そういう方にとってそういうふうにしたときにどうなのかなというはあるんですが、そういう方をどうするかというのも一方で考える必要があるのかなというふうに思っていますが、余りクラブ活動が偏重になり過ぎていないかなという心配はあります。

○山名教育委員

先ほども言いましたように、全国的な流れとして一応の目安として、週4回ぐらいがクラブ活動ベターではないかと。要するに、それで土曜日、日曜日のクラブでどこかにいわゆる試合が入ったとしたら、やはり土日や本来はどちらかは休みましょう。日曜日に試合がどうしても入ってくると。今の中学生の試合の数からいくと集中するとずっと土曜日、休日は大会をやるような試合がある。そうしたときは月曜日にきちんと徹底したノークラブデーとか。そういうノークラブデーというのをいわゆる今でも言って数字として出てこなかったのが、結局、進めていって広がっていますと言いつつ、実際にどの中学校でどのクラブがノークラブデーはどれだけ実施しているかという感覚でいったら、僕の聞いている範囲内では、僕の知っている数少ないクラブ活動をしている子に関して

は、やはり7日間ありますと。どう思うって聞いたら、何日ぐらいがいいと聞いたら4日やねというのが圧倒的ですね。やはり3日、4日。3日だったら少ない。4日ぐらいあっていいな。土日のうちの一日は休みたいとか。やっぱり中学生自体がそういう僕の聞いた中ではそういつている。今先ほど言いました熱中症のことにしても、昨日でも雨が降って、クラブが外でできなかったとしたら、昨日は三十二、三度あって、クラブが外でできないからといって、校舎の中で1階から4階まで4往復する。そうしたらその子はやはりほぼ倒れた状態になってしまって、一人がうち来て、これはやっぱり熱中症ですよ。やはり暑い湿度が高いときに校舎の中で、普段、校舎は走ってはいけないという場所をクラブのために結局、運動のために4階まで走る。そうしたら、その子は顔面蒼白になって吐き気をもよおして、明らかに熱中症です。やはりこれはやり過ぎ。やはり今は熱中症も考え方として昔の考え方じゃない。その日のうちに戻るわけない。1週間ぐらい尾を引きますからね。それなのに、また次の日にはクラブ活動があって行かないといけないけど、どうしようとなる。診断書を書こうかという感じになるわけ。これひょっとしたら今度倒れたら入院しないといけないという形になったりね。そういうのがあって今言いましたクラブ活動の管理するほうの責任がすごく問われるので、今言った暑さ指数なんかをきちんと守ってほしいと。子供の健康のために守ってほしいと。それを結局、クラブ至上で、成績至上でいってどんどんどんどんやるから、そういう意識を捨ててもらわない限りだめだと思うので、市長にも現に言ったように高砂市の冠のついた球技大会。いろんな大会が余りにも多過ぎると。全国にもそういうのが余りにも多過ぎると。これがやはり子供らの過密クラブスケジュールにつながっているのと違うかなというのもあるので、やはり周りの環境もクラブも学校の中でのことも考えながら、本当に主催者側といわゆるコマース的な形の商業ベースでいろいろな冠のついたものがあつたりしたら、そういうのはどうでしょうねという。再考してもいいかな。これは兵庫県レベル、全国レベルで考えてもらわないといけないだろうしというのがあるので、子供の過重な。それで成績のことを言いますと、結局、今体育クラブに入っている人数は少ないけど、そうしたときに今言ったように、休んでいいという形になったときに、親が結局、今言ったように中学校のクラブ活動に命をかけて、高校へ進学体制の一つの判断材料。いわゆる成績の一つと考えていいたら、その子が結局その大会でどういう成績。属しているクラブがどういうふうな成績を出さないといけないかということで、休みたいと言った子がいたとしたら、休めない環境というのがあるわけですよ。そういう子のために引っ張られていると。やっぱりそのクラブがある何人かの生徒の成績のために、それも実際に実績があるから突然に成績を悪くするのは大変だろうということもありますけど、それに引っ張られている。そうしたとき、僕の一つの考えとしてはそういう子はやはりあるレベル以上にそれなりに期待する子は、学校内のクラブ活動とは別のクラブに地域のクラブに属してもらわないと要するに、明らかにそういう子はやろうという子に関しては、そういうこと推薦して、あるいは、それなりのことでもらわないとクラブ活動をしている子の半分以上ぐらいは適用にやっておきたいなという子があるのに、引っ張られて、引っ張られてどうしようもない。結局、逆にクラブ活動がその子にとって必ずしも心豊かな環境ね。いわゆるころもあるいは、健康上も育んでないのではないかということがあつたりする。そういう悪い影響がやはりあります。その辺の切りかえをきちんとしてもらおう。一大英断をくださないといけないのではないかと。してはいけないことはないので、結局、中学校クラブというのは、考え方次第で、達成感、達成感と言いますが、やはり成績オンリーに走っているところが多いので、それなりの個人成績とか。団体競技も確かにありますが、やはりそれなりのものは外でのクラブ活動を活用してもらおう形。そういう道を開いていないといけないのかなと思うのですが、一回あり方を考えたほうがいいのかと僕は思っています。

○登市長

神尾先生、現場体験されてましたよね。

○神尾教育委員

私は土日もずっとやっていたので、山名先生とこへも私の教え子。先生のところに行かれる子供さんはもう多分、弱っている子なので、いい情報はほとんど入らないのかなと思いますけれど、ただ、日本独自のシステムとといいますか。他国では恐らく社会体育が中心で、中学校の部活動とか放課後の部活動とか位置づけになっていない教育活動だと思うのですが、やはり過ぎてしまっただめなのですが、どこが適正化というのはこれまた非常に難しい問題でもあるのですが、部活動が中学生や高校生の心身の成長に非常に大きく寄与しているというのは、これは絶対に間違いないところだと思います。ですから、これをどうやって上手にコントロールしていくのかということところがポイントになると思うのですが、今の教師にすれば、長時間勤務の主因もそうだろうし、特に若い教師はだんだん顧問離れをします。それは勤務時間が縛られること。もう一つは何か起こったとき。事故が発生したときにすごい責任をもたされるというそこから少し逃げたいなみたいなどころだとか。これは別に教師に限らず、サラリーマンでもほとんどですね。今、働くことの意識調査なんかでも残業するよりも家庭を大事にするみたいな世の中の風潮かと思いますが、少し前も新聞に載ったように、体罰を起こしてしまうその原因が部活動のところにある。授業中よりもはるかに部活動のほうが多いと思います。あとは教師にすると希望しない部活動の顧問に。これも辛い。自分は本当はこの部をもちたいけれど、学校の事情でこれをもってくれないかと。特に体育の教師なんかだと絶対嫌と言えないですね。体育の授業をしていて、部活動をもたないなんてあり得ないだろうみたいな雰囲気がありますから、もちろん断ってもいいことでもありますけれども、やはり特に新任で来たりしたときに、この部活がないからもってくれるかと言われたら、仕方がないからもつとなったときに、意識の高い保護者がいるとこの練習では全然だめだとか。教師の意識の二分化もあるし、保護者の意識の二分化もあって、すごい保護者自身が学生の頃にハイレベルのところをやっていると、教師にもですけど、顧問にも求めますよね。そうするともっとやってくれ、もっとやってくれ。一方でもううちの子はとりあえず参加していたらいいから、体力づくりだからというこの二極化。ニーズの多様化とかね。やはり考えると今ずっとさっきの話があったのは外部指導員を増やすしかない。まず一つは外部指導員を増やす。ただ、県のいきいき学校何とかというのが今年からなくなっていますかね。県が逆行していると思います。いきいき部活応援何とかというシステムがありましたよね。要するに、お金を出して外部指導員を雇うという県の施策が今年からなくなっていると思います。それは逆行しているなと思って。だから、人的補償はしていくことによって、一人一人の顧問の負担が減ると思います。あとはノー部活デーを確実にしないといけないだろうし、顧問の複数制というのもやったらいいのかな。複数制で望まない部活に顧問としてしないといけないけど、ただ、事務だけでもいいわけね。現場に出なくても。結構事務とか大変ですから、事務だけでもいいからするとか。そういう複数担任制だとか。もし事故があったとき現場の管理職とか、教育委員会がどれだけ当事者となってしまった顧問をどれだけバックアップできるような態勢をつくってあげるだとか。そういうところが少しずつすぐできるようなことから、すぐかどうかはわかりませんが、方向性としてできることかなと思います。

○山名教育委員

日数はいかがですか。

○神尾教育委員

日数は、まずは、週一は絶対に休まないといけません。ほとんど僕はできているというように思っています。週一ね。ただ、月曜日オンリーじゃなくて、というのは、現場のあれがあって、例えば、グラウンドでも体育館でも複数を使うとこの部が月曜日に休むから、自分のところは火曜日に休むとか。木曜日昼から休むというのは、木曜日はお医者さんが休みなんで、この日が自分のところの部活動は例えば、柔道とかでけがをしやすいとかだったら、木曜日昼から午後診がないのでこの日はしないとかいうことで、曜日をいろいろばらけて休んでいると思いますが、結果的には平日の週一はできている。ほとんどできている。ただ、市長も先ほどおっしゃったように、ずっとやりたいという顧問の方が当然いらっしゃるので、そういう人たちは本当に規定を超えてやっているのかなと思いますが、ただ、規定という話で言えば、また事務局のほうに確認してほしいのですが、随分前も十数年か高砂市内の部活動の顧問が集まって、一つの指針をつくっています。その中に先ほどの話に合った夏時間が6時半、冬時間が5時半というのを一応決めているのです。ただ、高砂市の場合は原則としてそれを決めている。ただ、例外として顧問が直接指導しておればそれが延長できるという。短時間延長できる。だから、夏時間の6時半が7時になる。5時半が6時になる。顧問が指導していればその限りではないみたいな一文が多分入っていると思います。ですから、その部分が多分、姫路とか、加古川とか、明石とは違う。それは顧問会での確認になっているのです。それまだ効いていると違うかなと気はするのですが。もしそこにテコ入れをするとかいうか。いろんな意識を入れるのだったら、その文章から見直していかないとダメなのかなと思う。

○登市長

吉田さん、クラブ活動で何かありますか。

○吉田教育委員

私は山名先生がおっしゃったように、やはり風評被害については母親として相当聞いていました。子供が中学校に入学する前に、とにかく入ったら余程気力も体力も頭脳もしっかりした子でなかったら、高校受験失敗するから、とにかくかわいそうだから私立に行かしたほうが良いよということをかかなりしつこくすすめられまして、でも、うちは子供たちみんな公立に行きましたが、確かにそれを親としては覚悟して、相当親がコントロールしなくてはいけないのだろうなという思いで入りましたが、部活によりますね。二人全く違う部なのですが、片方は本当に早朝から出て行って、朝練して、朝練も学年が、一年生は7時から来いとか。なんか学年によって、上へいくほどゆっくり行けるとかいうので、昼もミーティングがあるからお弁当が半分しか食べられなかったとか。夜は夜でもう真っ暗になっても帰ってこないみたいな。土日はずっと早朝から練習試合、遠征試合という部でしたので、結局スポーツ推薦を目指していらっしゃる方がたくさんいらっしゃるので、私たちの子供がぐずぐずしているとチームプレイだとそういう子がいると負けるので、逆に怒るわけですよ。保護者の方も。ですから、そういう方たちは中学校の部活動というのは職業訓練所ではないので、そういう目的をもたれている方はクラブチームに行っていたかかないと子供たちは楽しめないのも、本当に就職のつもりで頑張らなければいけないというのはかわいそうなので、結局楽しみでやりたい人は辞めてしまう。もう迷惑をかけるしということ。それは違うと思います。だから、それでスポーツ推薦して入られた方たちが何年後にどうなっているかということも見ていただきたい。やっぱり全国から強い子が集まってきたところでどれだけ生き残れるか。結局、普通に受験して、普通に高校に行った子たちよりも本当に苦しい選択をしてしまっ

て、かわいそうとしか言いようのない結果の方がたくさんいらっしゃいますので、それも考えたらやはりそういう人はクラブチームに行ってもらおうというのが一番いいのかなと思います。その子のためにも。

それとそういうふうにして、子供を時間で縛ると地域に戻れないですよ。例えば、お祭りなんかで小学校一年生のときから地域の人とずっと接してきて、地域との関係がすごくうまくいっていたのに、中学生は部活があるからというので一切祭りにも参加ができなくて、三年間離れてしまうと今後なかなか入っていけない空気があるので、できたらやはりもう少し自分たちに時間の余裕を持たせてあげてほしいなというのはあります。

それともう一つ、私の経験ですが、私も剣道部で非常に厳しい部に中学校のときにいたのですが、朝練もありまして、その学校。大阪だったのですが、そのころ大阪は非常に学校同士競ってしまっていて、一斉テストなんかもあって順位がついて、そうすると定期試験の1週間前というのは一切部活禁止です。そうすると毎回、中間、期末、中間、期末の1週間前、その範囲をきちんと勉強しているとそれほど落ちこぼれないです。その1週間だけは一切部活しないで勉強しろというので、授業が終わったら門を閉められて出されてしまう。やっぱりそれがよかったのか、高校受験の結果としたらやっぱり非常にたくさん、その校区で一番いい高校に六十何人。クラスでいうと2クラスぐらいがぼんとそこに入っていましたので、やっぱりやるときはやってもいいんですけども、勉強する期間というのをきちんと与えてその間は体力的にも楽になって、時間もあってということをおまめにきちんとやっていけばそういう方法もあるのかなというのは感じています。

以上でございます。

○登市長

ありがとうございます。いろいろ短い中にもクラブ活動でたくさん意見が出ましたが、教育長さん、全体として何かありますか。

○衣笠教育長

本当に貴重な意見、学校についてもいただいたなと思っています。野球部の試合数を少し調査したときに、練習試合を含めたら年間50ぐらいのところ結構ありました。それに驚きまして、今言いましたように、例えば、年間50ということはほとんど週一回はやっているということ。

○神尾教育委員

一日、2試合か3試合します。

○衣笠教育長

そういうこともあるので、山名先生がおっしゃったように、教師のほうも余裕をもってというのはやはり週二回ぐらい。県も国の方針、また県の方針というか、高砂市においてもノー部活デーということをやっているのですが、その練習試合も含めてのノー部活デーということを考えていきたいというふうに思いますし、子供の気持ちとか、保護者への理解とか、また、山名先生がおっしゃったような運動医学みたいなこともしっかりと踏まえて指導者は対応していかなければいけないということもよくわかりました。学校教育の一環としての部活動のあり方ということをしつかりと考えていきながら、しっかりと部活動のあり方を考えていきたいというふうに思いますし、今後、意見はこの教育委員会と教師だけの今本当に委員のほうから貴重な意見をいただいたので、保護者

の方の意見も聞きながら、部活動のあり方というのは改めて考えていく必要があるなどというふうに感じました。ありがとうございました。

○登市長

ありがとうございました。

一応、予定しておりましたのは、小中一貫だったのですが、また別の項目も入ってしまいました。時間もきております。ここで一応、総合教育会議を閉めたいと思うのですが、何か特にこれを言っておきたいということがありましたら。よろしいですか。

それでは、以上をもちまして、総合教育会議を終わらせていただきます。

ありがとうございました。

○事務局

本日の議題は全て終了しました。これをもちまして、平成29年度第1回高砂市総合教育会議を閉会いたします。どうもありがとうございました。